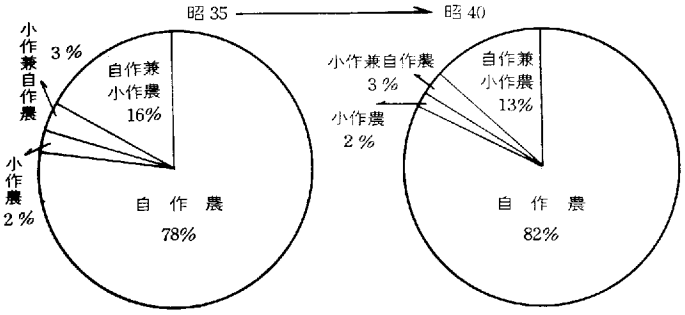
工業化の進行によつて、市部、その周辺の農地潰廃面積が、今後さらに増大するとみられるので、農地の細分が、一層すすむことも推定される。

また、自小作別の農家戸数の推移をみると第19図のように、自作農が増加し、自作兼小作農家が減少傾向を示し、農地の移動もかなりおこなわれている。

第19図　自小作別農家戸数の推移



しかし、すでにみたように、小規模な経営耕地面積の適正化が、農地の自然な移動にまかせられるならば、農業と他産業の格差は、いよいよ拡大することになり社会の緊張すら生ずることにもなりかねない。

自立農家方式にせよ、協業方式にせよ、立地条件に適合した経営規模の適正化を推進する必要がたかまろう。

(3)　技術革新と農業

機械による均質な物の大量生産を特色とする工業化の進行は、交通通信の発達によって、その製品は、農山村にも浸透して、農業そのものの生産方法もかわってきたし、今後も、急速に変化していくことになろう。

第4表は、農用機械所有台数の推移を示したものである。

第4表　農用機械所有台数の推移

	昭35		38		39		40	
	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数
	台		台		台			
電動機	35,507	100	39,289	111	38,564	109	−	−
発動機	39,477	100	48,457	123	48,209	122	−	−
動力耕うん機	15,924	100	50,233	328	62,725	409	79,867	521
農用トラツク・三輪車	1,353	100	3,452	255	5,840	432	4,444	328
動力噴霧機	6,606	100	11,480	174	12,096	183	12,663	192
動力撒粉機	1,403	100	5,468	390	4,809	343	5,352	381

昭和35年を100とした指数によつてみると、動力耕うん機は、昭和40年には、521に増加しており、動力撒粉機は、381、農用トラツク、三輪車は、328とのびており、農業機械化への動きをあきらかに示している。

農業就業人口の減少傾向にもあり、省力経営の必要から農業機械の導入はさらに多くなるものと考えられ、稲作に例をとれば、耕うん、播種から肥培管理、病虫害防除、刈取り、調整まで、機械化されつつある。農業機械は、大型化の時期に入っている。大型農業機械の導入は、耕地の面積も大幅に